

# 大陸（満州）

## 野戦重砲兵一番砲手

### ノモンハンの激闘に生きて

新潟県 神田 修 一

―ハルハ河の戦闘―

過ぐる大戦で、初戦以外日本陸軍はいずれの戦場で  
も「出ると負け」はどうしたことかと思っていた。

私は野戦重砲兵、十五センチ榴弾砲の一番砲手の距離観測の役目で、ノモンハン戦闘に参加した激戦の経験者である。十五センチ榴弾砲は、一発が三十キロの重量の弾丸を約十二キロメートルもの遠くに撃てて、その発射弾数も一分間に三発も撃てる優秀な「九六式

十五榴」火砲である。今次大戦の二年少し前のことである。現モンゴル国、首都ウランバートルより東方地区、中国北方の国境での戦いである。

日本砲兵の弾着観測法は、高い所に登り弾着を肉眼で見、左右遠近を修正しながら射撃する三角観測法で、敵との距離・方位の計算は、その素早さと優秀さを自負していた。敵ロシアには、この三角観測法のほかに音原標定法というのがあり、日本砲兵の発射音を捕らえると二―三分後には十―二十キロメートルの遠方からの発射でも、我が砲火壕の二メートル以内に弾丸が落下するほどの正確さである。この方式を音原標定法と、私の中隊長中尉、東久邇宮盛厚王殿下と側近の貫名少佐の言葉であった。

中隊長と側近は、敵の弾道の落下角度を調べてあり、

砲が入る壕の構築に、その高さ、厚み等種々指示されて、従来教えられた寸法の倍以上に土を積み上げ、これなら敵弾は壕内には落下しないといわれた。

七月二十三日、待ちに待った全軍の総攻撃を開始するや、私の砲の右隣の第一分隊の火砲は発射の反動で試射三〜四発目に右脚が折れ曲がり、戦闘不能となつてしまった。この十五榴弾砲は試作砲で十分な試験が済んでいなかったと思われたが、故障はこの砲だけで、他は無故障であり、富士裾野での実弾射撃演習では四〜五千メートルの標的のムシロに三発ぐらいで穴を空けるほどに命中する優秀な火砲であった。第一分隊の砲が脚折れにより、私の分隊火砲に発射号令が掛かった。もう敵は音原標定をもつて撃ち込み、壕壁にも命中する正確さだ。初めは目と耳を指で押さえ口を開き壕内壁に伏せたが、側近のいわれたとおり、壕内には敵弾は落下しないので、いくら撃ち込まれても射撃は中断せず打ちまくった。午後二〜三時ごろになると敵弾は一発も飛来せず、対岸ハルハ河台上の崖を上下している敵トラックを撃つていて、日がかげり出して「撃

ち方止め」となった。

この日の発射弾数は三門で三百五十発と観測がいわれた。中隊長殿下が観測所で落下弾数を数えたら、十センチ級、十五センチ級の敵弾が一分間に百〜二百二十発、十分間撃たれると千発〜千二百発（レイテ戦記）では、米軍の砲弾五千発という）の落下である。観測所より百メートルほど離れた中隊の四門の火砲は、一門は故障、炸裂煙で見えないときもあったと殿下（中隊長故双眼鏡で観測している）の言葉であった。射撃目標は、四〜五十ほど弾丸箱の木片に書いて壕壁内に林立させてあり、左から順次撃ち負かし、目標が新しくなる度に猛射を浴びながらの射撃の連続であった。夕刻の「撃ち方止め」でつくづく火砲を見たら、発射の振動で火砲は一メートルも土中にめり込んでいた。

―我が重砲兵陣地は集中砲火を浴びた―

七月二十四日早朝から、わが重砲部隊は敵の砲兵陣地を求めて射撃を開始して間もなく、敵また我が砲兵陣地に狙いをつけて集中射撃を開始し、陣地一帯が全

く敵の弾幕に覆われることになった。二距離の夾又射撃で精度は極めて良好、我が方陣地は全く弾幕を被り、装薬の発火する焰が中天を焦がす有様で、砲兵陣地から三百メートルぐらいの小高い丘で戦況を視察していた私は、最早戦闘力は皆無であろうと思わせるほどの熾烈さであった。こんな激しい集中射を浴びるのを見たことがなかった。(ノモンハン機関誌)

一日中最長距離の射撃では、最強火薬の使用する激しい戦闘であったが、一人の負傷者も出なかった。敵弾の数だけの石が飛んできて大変だ。この破片はダンプから砂利をぶちまけるさま同様で、こんなに撃ちまくられても壕内には破片すら入らず、我が第一中隊は一度も射撃を中断せず撃ちまくり、約四十日間の戦闘で砲の射撃中での戦死者は一名、負傷者は三名の軽い犠牲で済み、殿下と側近(付添い)の言われたとおりの壕の造りが、こんなに効果的であったかと、その安全には感心した。

他の中隊、また他の連隊では、壕の造りが積増不足と敵弾落下角度を調べていないうかつさがあって、敵

弾やその破片はもろに壕内に入り、犠牲者も多く発生した。この戦闘の様子の記事には、だれだれがやられた、傷ついたと勇壮に書きあらわしてあるが、我が第一中隊では犠牲がないのでこのような記事にならないから、戦いをなまけていたようにも取られていたと思う。事実、他の中隊では壕構築不備のため、敵弾飛来音を聞くと退避壕に入り、射撃は中断で十分な働きではなかった。

この猛射では、歩兵部隊も携帯シャベル一本での壕造りでは、壕は振動で崩れ浅くなり、兵は地表におどり出てしまう。このため犠牲は、兵はもちろん中隊長も大隊長も連隊長までも犠牲者が出て、第二次大戦に匹敵する程の激戦だった。

私の中隊は、絶対に敵弾は壕内に入らないから、最長距離の一万千八百〜九百メートル、すなわち十二キロメートル弱にいる敵重砲隊と約一時間も撃ち合った。敵弾は壕壁に命中している正確さだが、私の砲も距離計器盤の目盛線、物差しの寸法の刻み線、零点何ミリの極細線の右端、左端、中央と針先を微細調整での射

撃である。弾丸は上空の風の影響を受けて命中しなかったが、こつちが射撃を止めないので敵は砲口の移動をはじめ出した。我が砲より五十〜百メートルほど離れた地点に落下したときに、我が砲は命中と思わせて射撃を止めると、敵はそこに猛烈に十分間ほど撃ち込んでいる。その間に我が方は十分に距離観測を行い、その観測の指示で砲も十分の調整と発射準備を終えて待機して、敵が撃ち方を止めて五分〜十分ほど過ぎたころ（火砲の点検もすみ、小便に壕外に出て来た頃をみはからい）に、我が中隊は一斉に猛射を浴びせる。と、観測所からの電話は、我が十五榴弾の命中・炸裂で敵兵も機械も空中高く飛散と報告があり、「命中方歳」を叫んだ戦闘も数々あった。

我が十五榴弾砲、一個連隊は十六門で十分間撃てば、四百八十発は打てるが敵のように連隊で一目標に集中射撃はしなかった。我が中隊の発射弾数は、一日に三百五十〜四百発ぐらいだった。

三嶋連隊長負傷で後退し、敵戦車群の重囲で連隊長代理・梅田少佐は陣内でピストル自決、大隊長代理他

多数戦死して、我が第一中隊と第二中隊は全滅してしまつた。

―九死に一生を得る―

この日の射撃は、敵戦車との距離四百〜五百メートルぐらいで、重砲が零距離射撃だ。数多くの敵戦車を撃破したが、弾丸底をつき、敵戦車はキャタピラで踏みじりに来たので私は敵戦車に肉迫攻撃と壕を飛び出し、敵戦車に向かう。「全速早がけ」の両足交互に接地す前に足の下を戦車機関銃弾が、棒で水面をひたくくように土砂をはね上げながら、右から、左からの掃射で、立ち止まることもできず、ただただ戦車に向かい走り続けるばかり。精根つきで倒れてしまつた。

敵の照準がもう一ミリ上げていたら、ミシンで縫つたように私の足の脛は打ち砕かれて戦死していた…。

その時刻は、昭和十四年八月二十七日午後四〜五時ごろであつた。記録では後四〜五日戦つていたことになつているが、守勢部隊として私らの外、野砲と歩兵隊他少々残存していたが、敵に刃向かう数ではなく、

我が十五榴弾砲の壊滅で守勢側は戦闘不能となつてしまつた。

半分迂回した攻勢部隊も、基幹になる十五榴弾砲隊は我が一中隊のように壕の構築をしていないので、敵砲兵に撃ち込まれて射撃は中断の始末である。歩兵は途中までしか進出できず、迂回して外側から敵を攻撃し、我々守勢軍を救出する作戦でしたが、作戦は不調に終わり、死傷者一万とも二万ともいわれている。他に捕虜もあり、軍は被害数をひた隠した。

日本軍の戦闘方式では手も足も出ないのが実状で、守勢軍は見殺しにされてしまつた。通信機も幼稚で連絡も取れず、連隊長級、大隊長級、中隊長級を無断後退と命令違反と自決、投降等、「一兵でも銃剣を持つて戦え」との命令だが、猛爆撃、機上掃射、猛砲撃、戦車軍を相手では大死で勝利にはつながらなかつた。

ノモンハンの八月末の気候は、昼は三五度以上の暑さ、夜は霜が降る寒さで、私は極度の疲労で死人同様に敵中に倒れていた。しかし、この寒気で生気を取り戻し、敵兵の脇二〜三メートルをすりぬけたら敵歩哨

に発見され、曳光弾を打ち上げられ、昼間のように明るい中を敵戦車に追われ、キャタピラの音を後に聞きながら夜空の北斗七星をたよりに後方ノモンハンに向かつた。途中、他の部隊の負傷兵に手を貸していて中隊合流に七〜八日遅れた。

夜明け前、援軍歩哨の誰何（外来人を確認するため氏名等聞く）を受けると同時に夜空は急に明るみ、ダダダと機関銃の撃ち合いとなつた。戦闘開始と同時に車エンジンの排気音が身近かに耳に入り、あたりを見ると右脇十五センチにトラック荷台後部が見え、無意識に飛び乗る。と同時にトラックは走り出し、一晩中歩き続けの疲労で眠つてしまい、トラックから降ろされても目が覚めず、照り付ける太陽熱で正午ごろ目を覚ました。

場所は將軍廟あたり、行き交う輜重隊のトラックを止め、転進第二大隊の所在を問うも知るものなく、いつの間にか負傷した歩兵が私の回りに集まること五〜六十名、傷口に蛆が見え、ぐずぐずしていると蛆は内臓に食い込むと死んでしまうから、トラック三台を止

め負傷者を乗せてもらい、ハイラル陸軍病院に引き渡した。

五、六名の看護婦は私をつくづく見回し、よくも傷もなくと皆で抱きかかえるように院長のところまで案内した。二十七日朝、発射火薬消火中、火が入った薬筒がロケット弾のように飛び上がり、その筒尻で前金歯をめくられ、これに唇が引っかけり八重歯の面相。垢と土に汚れ、痛んだ。軍服も破れ、戦車砲弾片で破壊銃床がぐらついている小銃で「捧げ銃」をし、部隊官姓名を名乗り、八月二十七日以来の出来事を報告した。また、第二大隊転出先を聞いたが院長では分からず、院長専用乗用車に乗って、駐屯地司令部に出頭した。

ここでも同じ事を報告、畳程の戦場地図で部隊所在を探すも、混戦で所在不明。戦場に戻って探すよう、また、砲の撃針（火薬について発射させるもの）を持って来たかと問われた。肉迫攻撃で砲側を飛び出す折一瞬振り返ったとき、脚尾に三発砲弾がころがって、私が替わろうといった兵も一番定位置に濃緑色

の顔相（死に直面興奮している顔色）で砲のハンドルを抱いていたので「撃針は抜いてきません」と返答した。撃針を持つてきたら金鶏勲章もの。

戦場に戻るべく「捧げ銃」をしたところ、司令官は「その銃は君のか、弾は入っているか」との問いに、「銃は私のもの、弾丸は一発自決用に入っている」と答えると、「弾丸は抜いて破壊したところをこの手拭で巻き、他人に見られないように、今宿舎に電話するから三日間休養を取って戦場に戻って探せ。ご苦労」と言われた。敗残兵の扱いでなかった私が一番先に全滅現場の報告者である。

肉迫攻撃で飛び出す前、戦車砲弾片で私の銃把は破壊、このとき、撃鉄を引いて引き金に指を入れていた右手首を取られて戦死状態となっていただろう。それが、内地の原隊に戦死の電報を打たれていて、この取消しに一悶着があった。

肉迫攻撃は爆雷携行だが、砲側には爆雷がないので、私は小銃を持って敵戦車に走りよった。敵は、死んだように倒れている私が爆雷を抱いているものと、キャ

タピラで踏みにじらずにさけて行つた。敵は生死確認のため銃剣先で太股を刺して回り、前後不覚に倒れていても刺されてピツと動けば捕虜となり、今日現在ソ連で働いていたことであろう。あの場所で倒れているのは、絶対に機関銃に当たり死んだもの、と思つて銃剣で差さずに行つてくれ、幸運にも私は生還した。

また生還した兵の話では、戦死者の死体の下にいたところ、生死確認の剣先が死体を突き通つてその兵の人差指と中指の間に刺さつたが、それが不幸にも肉体部にも差されたら捕虜になつていたと。

停戦後、私の体は疲労のため瘦せ衰えて、中隊での兵舎勤務では休養は取れないとて、新任連隊長入江中佐の官舎当番を命ぜられた。約半年間のこの営外官舎生活で体は元に回復し、中隊幹部の皆様のこのような心遣いはありがたかつた。

—東久邇盛厚（当時の中隊長官）の手記—

「私はこの軽車輜団を指揮したが、殆ど軍隊の経験すらない運転手の操縦するトラック二百余輛を指揮し、

道無き広野を磁石を頼りに昼夜続行軍し、幸いに一台の落伍車もなく無事翌朝戦場に到着した。その後大隊の展開、陣地進入も指揮し、戦闘では専らハルハ河対岸の戦車四、五旅団の進出阻止に任じ、殆ど百発百中一台も渡らせず、第一線師団は心からなる感謝の電話、電報を毎日受けた。

何しろ師団砲兵は改造前の三八式野砲、同十二榴という旧編成のため、手も足も出なかつたのである。その代わり敵からも朝四時から夕十時まで十五加砲の返礼を受け、私の中隊は、その砂煙のため戦場のどこかにもそれと判つたという。

然し工事を十二分に行つたため、各砲の百メートル四周に百乃至百二十発づつ、砲座に十発ぐらいずつ弾丸を受け、指揮所もその破片のため壕外も手のつけ場もないくらいであつたが、戦死者は砲側で一名、段列で二名で、他の中隊が初日に三分の一乃至半数を失つたのに比し、僅少ですみ、私の下にいると死傷しないというジンクスさえ生まれた。

したがって行動は勇敢になり、中隊段列では急襲し

て来た百名の敵を十名で撃退し、また動員で大隊本部  
に行った通信班も、歩兵団の将校伝令がどうしても行  
けない第一線連隊に通信線を張り、一時間ごとに保線  
手が往復していた。

八月二日、定期異動により、私は中隊を後任中隊長  
に申し送り、將兵と別れて阿城重砲連隊に移った。こ  
の頃はノモンハンの戦場も自然平穩な状態に入り、連  
隊は神武屯へ移駐の内命を受け準備中であり、何れ彼  
の地で会おうと楽しく別れたのであった。

然るに八月末ソ連軍の攻勢により、中隊は砲が壊れ、  
弾丸尽き、私が別れに贈った日章旗を須田軍曹が翻し  
て最後の突撃をなし全滅したとの報を聞いたとき、私  
は飛んで行きたい思いで一杯であったが、生き残りの  
將兵を電報で激励する以外どうしようもなかった」

(ノモンハン機関誌第三号「砲兵の思い出」東久邇盛  
厚)

私の履歴は元野戦砲兵第一連隊第一中隊、一番砲手、  
馬鹿でもできる砲手班の一員だが、砲手になっていて、  
いい経験もして立派に活躍もできて死なずにいられた。

私には「七」のつく日に生死にかかわる事が起き、  
七のつく日を調べて見ると皆大きな出来事が起きてい  
る。

○私の出生―大正六年二月七日

○父の死亡日―昭和十七年五月二十七日

○ノモンハン出征残留組が出征組替―七月

○松戸発もハイラルまで―七日中

○ノロ高地方面の戦闘―八月七日

○第一中隊全滅の日―八月二十七日

○再召集日―昭和十九年七月七日

○召集部隊―東部七十二部隊